

厚生労働科学研究費補助金（障害者政策総合研究事業）
総合研究報告書

高次脳機能障害者の社会的行動障害による社会参加困難への対応に関する研究

研究分担者：上田 敬太 京都大学医学部附属病院精神科神経科 助教

研究要旨

社会的行動障害は、社会参加に影響すると考えられるが、実際にどのような影響を介護者に与えているかについてはまとまった研究はない。上田の担当する分担研究においては、Zarit 介護負担尺度と、認知機能、前頭葉機能障害の行動尺度との関連を検討し、その影響について明らかにした。また、高次脳機能障害の実数については、従来の報告の方法と大きく手法を変え、原疾患ごとのフォローアップのされ方から検討することとした。対応の仕方については、研究班の班会議の中で理想的対応を検討した。

A．研究目的

社会的行動障害を有する高次脳機能障害者について、介護負担度に関連した指標についての検討を行う。社会的行動障害の強い症例について、どのような対応、どのような治療が必要になるか、症例をもとに検討を行い、推奨される対応策について検討を行う。

また、高次脳機能障害の有病率などについては、これまで様々なアンケートによる結果があるが、脳損傷を生じた症例のうち、どの程度の症例が高次脳機能障害者支援に結び付いたか、という視点での検討はなされてこなかった。そこで、分担研究者の野田とともに、明らかに脳損傷を生じる疾患について、そのうちどの程度の割合が支援に結び付いているかを明らかにし、より高率に支援に結び付く体制を目指すための基礎的資料を作成することを目的とした。

B．研究方法

京都大学医学部附属病院精神科神経科、脳神経外科に通院中の症例について、介護負担尺度として Zarit 介護負担尺度、精神症状の指標として Neuropsychiatry

Inventory (NPI)を行い、また、基本的な認知機能である知能検査 Wechsler Adult Intelligence Scale -III (WAIS-III)、前頭葉機能障害による行動異常の尺度である Frontal Assessment Behavior Scale (FrSBe)をとり、その関連を検討した。

また、理想的な対応方法については、実臨床に基づいて、班会議での検討を重ね、特に精神科医の果たす役割について検討を行った。

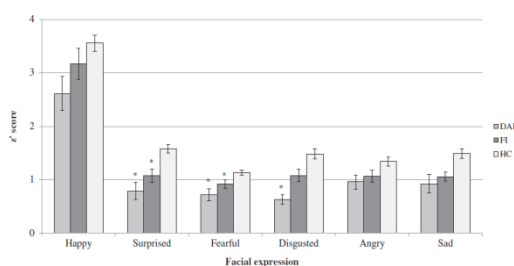
野田とともに行った検討では、野田が行っている全レセプトデータを利用した、脳損傷原因疾患罹患後のフォローアップについて、適切になされているかどうかを検討する試みを行った。

また、社会的行動障害の基盤となる情動認知障害について、びまん性軸索損傷患者、前頭葉を中心とする局所脳損傷患者を対象に 3 T M R I を撮像し、情動強度評価尺度の結果と、脳損傷部位との関連について検討を行った。

研究は、京都大学医学部附属病院倫理委員会の承諾を得、書面での同意を得たうえで、情報の収集を行った。

C . 研究結果

従来、前頭葉を中心とする局所脳損傷症例においては情動認知能力が低下し、他者の情動表情の強度を低く判定する傾向があることがわかっていたが、び漫性軸索損傷症例においても、同様の傾向があり、おそらく前頭葉眼窩面を中心とする脳領域への白質結合性の低下が影響していると考えられた。



Zarit 介護負担尺度については、NPI のデータ収集が不十分であったため、暫定的に WAIS-III、FrSBe の家族評価による Tスコアとの相関について検討したところ、86 名の被験者のデータでは、知能検査と介護負担度の相関は有意ではなかったのに対し、前頭葉機能異常による行動異常の家族評価とは強い正の相関を示した。

(介護負担度と FrSBe の総スコアとの相関係数は $r=0.71$, $p<0.001$)

全レセプトデータを利用した、脳損傷原因疾患ごとの高次脳機能障害のフォローアップ率の検討は、現在データ解析中であり、まだ結果は出ていない。

D . 考察

社会的行動障害とは、いわば認知症における Behavioral and Psychological Symptoms of Dementia (BPSD) に例えられ、投薬についても対処についても、精神科医の参加が強く望まれる領域と考えられる。しかしな

がら、実情としては、脳損傷症例について精神科医がチーム医療の構成員として参加している事例は少なく、精神科医の参加を促進する何らかの手段が必要と考えられる。また、社会的行動障害は、今回のデータからは、いわゆる古典的認知機能との関連は薄く、古典的認知機能から社会的行動障害を推測することは困難であると考えられた。情動認知そのものの障害も生じやすいことが示され、社会行動障害を持つ高次脳機能障害者への対処の仕方、あるいは疾病教育の在り方に応用する必要があると考えられる。

NPI のデータはまだ集計が終わっておらず、介護負担度との関連は数値としては出せていない。暫定的に同時に収集しデータが利用可能であった FrSBe との関連について検討したところ、強い正の相関を認め、前頭葉機能障害が介護負担度に大きく関連していることが分かった。ただし、FrSBe の下位項目である「衝動性 disinhibition」「アパシー apathy」「遂行機能障害 dysexecutive function」いずれもが同様の強い相関を示し、より細かい症状についての尺度である NPI を用いてさらに検討が必要であることが分かった。

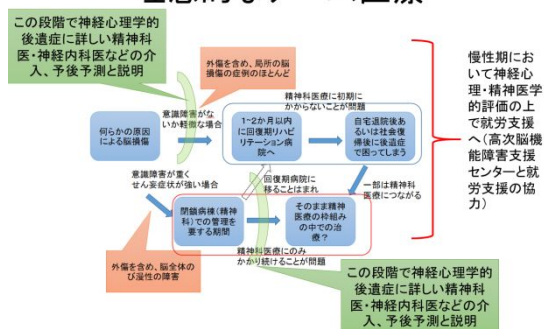
E . 結論

高次脳機能障害は、急性または亜急性に生じた脳損傷の後遺症のことであり、社会的行動障害はその後遺症の重要な一部分である。しかし現状の脳損傷医療では、急性期から回復期にかけて、精神科医がかかわることが少なく、社会的行動障害に焦点を当てた情報収集や、向精神薬を利用した症状の改善の試みがなかなかされていないの

が現状と考えられる。社会的行動障害のために社会復帰が遅れる症例、あるいは家族が疲弊しやすいことなどを考えると、脳損傷後の医療体制の中に、精神科医の参加を組み込む必要性が高いと考えられる。

特に前頭葉機能障害に基づく行動異常（＝社会的行動障害）は、家族や介護者にとって大きな負担になっていることが分かり、対応が急務であると考えられた。こういった症状に対しては、前頭側頭型認知症の behavioral variant など、前頭葉症状が前景に立つ疾患の治療などを援用し、工夫していく必要があると想定される。

理想的なチーム医療



F. 健康危険情報

特になし

G. 研究発表

1. 論文発表

上田敬太 脳損傷と攻撃性 臨床精神医学 46(9) 1077-82 2017年(総説)

上田敬太 脳損傷とこだわり 臨床精神医学 46(8) 973-978 2017年(総説)

上田敬太 情動と行動 神経心理学 34(4) 266-73 2018年(総説)

上田敬太 社会的行動障害に向けた対応

メディカルリハビリテーション 3月号 23-28 2018年(総説)

村井俊哉, 生方志浦, 上田敬太 社会的行動障害のリハビリテーションの原点とトピック 高次脳機能研究(日本高次脳機能障害学会誌) 39巻1号 5-9 2019年(総説)

Yassin W, Callahan BL, Ubukata S, Sugihara G, Murai T, **Ueda K**. Facial emotion recognition in patients with focal and diffuse axonal injury. Brain injury. 2017 March 28:1-7.

Ubukata S, Oishi N, Sugihara G, Aso T, Fukuyama H, Murai T, **Ueda K**. Transcallosal fiber disruption and its relationship with corresponding gray matter alteration in patients with diffuse axonal injury. J Neurotrauma. 2019 Apr 1;36(7):1106-1114.

2. 学会発表

(発表誌名巻号・頁・発行年等も記入)

村井俊哉, 生方志浦, 上田敬太 社会的行動障害のリハビリテーションの原点とトピック 高次脳機能研究(日本高次脳機能障害学会誌) 39巻1号 2019年

H. 知的財産権の出願・取得状況

なし